

1 赤血球製剤の廃棄減少を目指して

2
3 山本喜則 五十嵐謙吾 木村沙紀 長谷健二、
4 高階成実 丸山千恵子 木村豊 中村文隆
5 (帝京大学ちば総合医療センター 検査部)
6

7 【目的】輸血製剤の有効利用は医療従事者の責務で
8 ある。当院においても輸血療法委員会を中心に有効
9 かつ適正な使用を推進するよう活動している。しか
10 し 2010 年の千葉県赤十字血液センター集約により
11 有効期限の短い赤血球製剤が搬入されるようになり、
12 製剤廃棄を防ぐためには院内の体制変更を余儀なく
13 された。今回当院が行った対策と効果について検討
14 を行ったので報告する。

15 【対策】2010 年に在庫製剤単位数を減少させた。
16 2012 年より手術用準備血の早期返却を行い、在庫製
17 剤として取り扱うことにより更なる在庫製剤単位数
18 の減少を図った。

19 【方法】2009～2012 年の赤血球製剤の廃棄率を中心
20 に使用状況（依頼状況・使用状況）について解析を
21 行った。

22 【結果】廃棄率は 2009 年 1.30、2010 年 2.11、2011
23 年 2.52、2012 年 1.78(2012 年分は 1～10 月の結果)
24 と推移していた。

25 【考察】廃棄理由は期限切れが 90%以上を占めてお
26 り在庫製剤の過剰状態が廃棄率に影響していると考え
27 られた。2010 年より在庫製剤単位数の見直しを行
28 っていたが、廃棄率が上昇していることから、使用
29 単位数に対し在庫単位数の過剰状態が改善されてい
30 ないことが示唆され、効果としては不十分であった。
31 2012 年より行った手術準備血の早期返却によって
32 廃棄率は減少傾向を示し、在庫製剤の過剰状態が改
33 善されてきたと考えられた。

34 【まとめ】今回、院内の在庫製剤の見直しを行うこ
35 とによって廃棄製剤の削減を図った。今後、更なる
36 廃棄製剤の削減を図るために、手術用準備血の依頼
37 単位数の削減について各診療科と協議していくこと
38 が必要不可欠と考える。

39 0436-62-1211 内線 1176